

学生の皆さんへ

青森公立大学における生成 AI の利用に関する基本的な考え方と指針（案）

青森公立大学 学長 神山 博

現在、ChatGPTをはじめとする生成 AI の技術革新は、現在も進化し続けており、私たちの社会や産業構造に大きな変革をもたらそうとしています。この変化は、教育や学問のあり方をも問い直すほどのインパクトを持っています。

青森公立大学は開学以来、「教育に責任を持ち、社会に対して教育の質を保証する」ことを教育理念とし、「経営経済の専門性を持った教養人の育成」を教育目的に掲げてきました。この理念・目的は、生成 AI のような新しい技術が台頭する今こそ、その真価が問われます。

青森公立大学の学生諸君が生成 AI に対してどのように向き合うべきか、現在の状況を踏まえ、基本的な考え方と利用指針・留意点を共有したいと思います。

<基本的な考え方>

1. 「なぜ」を問い、思考のプロセスを深めよ

本学の教育基本方針には、「常に『何故か』の問いを発し、自らの頭で考える知的訓練を課し、創造力を育てること」とあります。AI を使えば、もっともらしい答えを瞬時に得ることができますが、そこに至るまでの最初の「問い」を立てるのは人間です。

AI は知的訓練の道具として使ってください。AI を思考の壁打ち相手として活用することは許容範囲でしょう。しかし、苦勞して文献などを読み、思考を重ねていくというプロセスを AI に丸投げしてしまえば、皆さんの知力は鍛えられませんし、学問の面白さや醍醐味を経験する機会を逃してしまいます。楽をするためではなく、「創造力を鍛える」ために AI を使いこなしてください。

2. 情報の取り扱いに留意せよ（倫理と責任）

一般的に、組織において部下のミスは上司が負うように、AI が生成した内容に対する責任は、使用者である皆さんにあります。生成 AI は、時に平然と嘘をつき（ハルシネーション）、生成物には偏見を含む可能性があります。また、個人情報や機密情報を入力してしまうと、予期せぬ情報漏洩につながるリスクもあります。

さらに、AI の出力を自らの成果物として偽ることは、学問としての誠実さに反する不正行為であり、著作権法に抵触する恐れもあります。情報の真偽を確認し、倫理的に正しい判断を下すことこそ、本学が目指す「教養人」の姿です。

生成 AI は強力な道具ですが、あくまで道具に過ぎません。主人は皆さん自身です。「教養」と「専門性」という二つの武器を磨き、AI を従えて、未踏領域を切り拓くプロフェッショナルとなっていくことを期待しています。

3. AI に使われるな、AI をマネジメントせよ

生成 AI は膨大なデータを処理し、もっともらしい回答を生成することに長けていますが、そこに「意志」や「責任」は存在しません。皆さんに求めたいのは、「AI を自らの優秀な部下として使いこなす」という姿勢です。

組織において、優れたリーダーは部下に適切な指示（プロンプト）を与え、報告（生成物）の真偽などを見極め、最終的な責任を負って意思決定を行います。AI に対しても同様の姿勢が求められます。AI の回答を鵜呑みにしてそのままレポートに丸写しして提出することは、部下の報告を全くチェックせずに意思決定するようなものであり、上司としての責任放棄に他なりません。AI という強力な部下を使いこなすためには、指示を出す皆さん自身に、正しい知識と豊かな教養が不可欠なのです。

<生成 AI の利用に関する指針と留意点>

1. 授業における使用

学部および研究科の各授業内での使用に関しては、担当教員の考え方や指示に従ってください。但し AI を使う場合は、あくまでも知的訓練の道具として使ってもらいますので、どの局面で、どの AI（ChatGPT、Claude、Gemini 等の種類やバージョンなど）を使用し、AI から何が得られたかを報告してください。

2. 試験等における使用

各授業科目における最終レポートや試験、卒業論文の執筆などに関して、独力で取り組むことが求められている場合には、生成 AI を利用することは認められません。ある程度の利用が認められている場合であっても、AI の出力を自らの成果物とすることは剽窃とみなされ、不正行為となります。

3. 個人情報・機密情報などの保護

生成 AI に入力した情報は、生成 AI のサービス提供事業者のシステムに蓄積・学習される可能性があり、情報漏洩のリスクをゼロにすることは現時点では困難と考えられます。個人を特定できる情報、アルバイト先や所属組織で知り得た情報など、公開を前提としない情報は生成 AI に入力しないようにしてください。

4. 生成 AI を利用した他者への危害の禁止

現在の生成 AI は、実在する人物の顔・声・言葉や、動植物、自然現象等を精巧に模倣したディープフェイク（偽画像・偽動画など）を生み出すことができます。ディープフェイクは目で見ても真偽を見極めることが困難なので、デマを真実と誤認させる「証拠」を容易に捏造できます。こうした生成物が他者に危害を加えることは、たとえ意図していなかったとしても、十分あり得ることです。特に、特定の個人の顔や声を別の画像・動画・音声に合成・加工する行為は深刻な人権侵害であり、名誉毀損などの法的責任を問われる可能性があります。生成 AI をこのような目的で使用することは、本学の学生として、また社会の一員として、断じて許されない行為です。

以上